

INDEX

- p1 医師の勤務環境改善ワークショップ
- p2 山陽女子ロードレース救護班の一員として参加して…
- p3 シリーズ女性医師支援
倉敷成人病センター 女性医師支援 当院での取り組み

医師の勤務環境改善ワークショップ

岡山赤十字病院／岡山県医師会女医部会 部会長 渡辺 恭子

令和2年7月23日(木・祝)に県医師会館三木記念ホールで、松山会長のご挨拶、神崎専務理事の司会のもと新型コロナウイルス感染拡大の中でしたので、マスク装着、特別講演の日本医師会今村聡副会長は東京からのリモートで、ご講演・質疑応答いただく形で開催されました。

松山会長からは、当時岡山県のコロナ感染者は43人でしたが、全国でのクラスター発生をみて第二波・第三波の感染対策が必要とのお話をいただきました。

勤務医部会からは清水信義部会長が令和元年の活動報告を、女医部会からは渡辺が令和元年の活動報告(女医部会委員会、男女共同参画フォーラム、医師の勤務環境改善ワークショップ、ピンクリボン運動、おかやまマラソン・山陽女子ロードレースの救護、県民公開講座：360名、女医ボスアワード等)を行いました。

医療勤務環境改善支援センターの佐田先生からは、2020年から岡山県医師会館に医療労務管理アドバイザーの常駐体制が整い、2024年「医師の時間外労働上限規制」に備え、「医師の働き方改革のサポート」をオンラインで相談できるとのことでした。

(ホームページURL：<http://www.okayama.med.or.jp/special/iryokinmu/index.html>)

事例発表は津山中央病院の林病院長から、515床の3次救命救急センターで年間5,000台の救急車を受け入れ、2024年からの医師の勤務医時間規制に関してはA水準を目指し働き方改革に取り組みされており、10人の当直のうち病棟当直医以外は、勤務+時間外労働とする「二労働日連続勤務制」(17時半～24時を時

間外・翌0～9時を夜勤)とし、残業管理システムのソフト作成や時間外病状説明の中止や各種ICT(WEB会議、AI問診、Joy等)を導入し、タスクシェア、タスクシフトを考えられているとのことでした。

「医師の勤務環境と働き方改革について」今村副会長は、「地域医療の継続性」と「医師の健康への配慮」の両立を基本理念に、2024年からの医師の時間外労働時間上限規制に対し、①B、C水準医療機関の定め方、②B水準の評価・C水準の審査組織、③労働時間短縮計画、④健康確保措置、⑤タスクシフト・タスクシェア、⑥兼業・副業等、枠組みの整理と検討が必要ではあるものの、厚生労働省の「医師の働き方の推進に関する検討会」は、3月以降コロナ禍の影響で審議も進んでいない状況である、と述べられました。

現況は岡山県の累計患者数1,186人(全国21万726人／令和2年12月24日現在)とコロナ禍はますます人や医療を圧迫して、勤務医・開業医共に厳しい勤務環境にさらされていますが、「健康への配慮」が一番重要視されますよう願っています。



山陽女子ロードレース救護班の一員として参加して…

にいつ耳鼻咽喉科医院／岡山県医師会女医部会 委員 新津 純子

岡山市のシティライトスタジアムを発着点とした「有森裕子杯」ハーフマラソンと「人見絹枝杯」10kmロードが開催された12月20日（日曜日）は、よく晴れた朝であった。

女性だけのロードレースであることから、岡山県医師会女医部会委員会では、毎年救護班のスタッフとして参加している訳だが、その際乳がん検診の受診率向上のための啓蒙運動も兼ねている。

しかし、今年はCOVID19の影響で、市民ランナーの不参加、市民の応援も制限せざるを得ない中での開催でもあった為、啓蒙活動は十分にはできなかった（テントにのぼりを立て、パンフレットを置く程度のことしかできなかった）。

今年の私の担当は、ハーフマラソン最後尾に追従する車に乗って、何かあれば対応するというものであった。最後尾のランナー、白バイ一台、運営委員会の最後尾バイク、その後ろに我々（運転手、大会運営スタッフ、そして私の4名）が乗った車で走行した。



耳鼻咽喉科医の私がお役に立てるのかと一抹の不安はあったが、幸い何事もなく経験したことのな
いお役目を楽しませていただいた。

途中棄権4名のランナーを除き、最後尾のランナーも無事スタジアムに帰着できたとのことであった。

先頭を走るランナーについては、テレビ中継やラジオ中継で盛んに伝えられていた（車中でラジオ放送を聴取していた）。しかし、当然のことではあるが、最後尾のランナーについては何も伝えられることはなかった。

黙々と走る彼女の後姿に、こちらが勇気づけられる様な思いがしてきた。今年の初めからのコロナ禍の中、我々医療界も様々な苦労の中にあるのだが、そのことに対して、時には不平不満を口にすることも多くなってきている。しかし、彼女のように一足一足黙々と前に進むことが、今を生きるためには不可欠なことだと、彼女の後姿から諭されたように感じた。

さらには、沿道に立って見守っている市民の方々が、最後尾ランナーに惜しめない拍手を送って応援している様子をフロントガラスの向こうに見たとき、思わず涙がこぼれそうな程感動した（年々涙腺が緩くなっているが…）がいささか気恥ずかしいので、あくびをする格好でごまかした。

最後尾の選手は、1時間43分10秒のタイムでゴールしたとのことだが、私が彼女の後ろを走行したのは、おそらく1時間余りだろう。この1時間の間、様々なことを感じ、そして考えさせてもらえたと思う。

その日の午後、岡山県の発表で感染者数が一日当たり初めて100名を超えたと報告され、色々な意味で記憶に残る一日であった。



シリーズ
女性医師支援

病院での
取り組み

第25回

倉敷成人病センター 女性医師支援 当院での取り組み

倉敷成人病センター 病院長 梅川 康弘先生



当法人は創立者の故 須原銀兵衛名誉理事長が1968年に須原外科医院を開業し、その後わずか3年で組織の法人化を実現。「臨床・研究・予防」の3つを柱とする財団法人倉敷成人病センターを設立しました。

入院機能をもつセンター棟と外来機能をもつクリニック棟、リハビリ棟に加え、今年2021年2月に新棟を開設しました。

新棟1階には抗がん剤治療のための通院治療センターを既存棟から拡大移転したほか、念願であった放射線治療エリアを新設。さらに包括的ながん治療を行うための体制が整いました。2階には患者さんのストレス軽減に配慮し、輻射式空調の導入など手術環境を整備した「ロボット先端手術センター」を設置。医療機器面では内視鏡手術支援ロボットダヴィンチXiを2台体制とし、婦人科・泌尿器科を中心とした低侵襲手術のさらなる強化を図ります。その他にも、眼科の外来・手術・入院を隣接フロアに集約した「アイセンター」の設置や「透析センター」の増床移転など、治療環境や治療の質をより充実させるよう工夫を凝らしました。また、病院の緊張感を忘れることができる「心安らぐ癒やしの空間」となればと願い、落下する水の創り出すさまざまな模様を楽しむ「時の泉」など細部にわたり、こだわりをちりばめています。

今夏、設立50周年を迎える当法人は関連施設として「倉敷成人病健診センター」、高齢者施設「コミュニティケアセンター ライフタウンまび」、海外には「ジャパングリーンクリニック（シンガポール）」「ジャパンメディカルセンター（ロンドン）」「上海グリーンクリニック（中国）」を有しています。職員数は全体で1,000名を超え、その約8割を女性が占めており、女性医師を含め女性スタッフ全体への支援は法人としての重要なミッションの一つといえます。

● 「くるみん認定企業」

支援の主な取り組みとしては、父親の休暇取得の促進や年次有給休暇の計画的取得の推進、育児休業中の職員への社内情報提供の取り組みなどが評価され、2016年に「くるみん認定企業」に選ばれました。

● 「おかやま子育て応援宣言企業」

2015年より「おかやま子育て応援宣言企業」に登録し、下記の通り、子育て応援宣言を行い、実行するための具体的な取り組みを進めて参りました。

- 職員が育児休業から復帰しやすい環境を整備する一環として、事業所内保育園を設置します。
- 小学校就学前まで短時間勤務を承認し、職員の子育て支援を応援します。
- 地域の子どもたちの職場見学や職場体験を受け入れます。

後述の取り組みが評価され、令和元年度「おかやま子育て応援宣言企業」岡山県知事賞を受賞しました。

● 事業所内保育園



2017年4月1日に事業所内保育園「KMC すまいる保育園」（定員33名）を開園しました。それにより育児休業明けの待機児童がなくなり、円滑な職場復帰をサポートできるようになったほか、子どもが近くにいるので安心できる、何かあってもすぐに対応できるなど子育て世代の職員を支える体制ができました。

実際に育児中の女性医師に聞いてみると「年度途中の復帰のため、外の保育園には空きがなく、事業

所内保育園があることにより復帰がスムーズにできた。また、上司や先輩医師から、診療や手術が遅くならないような配慮もいただき助かっている」という話も聞くことができました。



● 小学校就学前まで育児短時間勤務が可能

仕事も頑張りたいし、子育てや家庭も大事にしたいという思いを実現するために、小学校就学前までの育児短時間勤務を認めています。時間に余裕ができて、子どもにゆとりをもって接することができるなどの声が聞かれ、年間70名ほどの職員が利用しています。職員一人ひとりの事情に配慮し、始業・就業時間の変更などにも柔軟に対応しています。

● 地域の子どもたちの職場見学や職場体験の受け入れ



毎年夏休みに職員の子どもを対象とした「子ども参観」を実施しています。当日は親と同じユニフォームを着用し、親や大人が働いている姿を参観します。参観後は親子で一緒に職員食堂でご飯を食べ帰宅します。毎年好評で多くの職員親子が参加しています。また、地域

毎年夏休みに職員の子どもを対象とした「子ども参観」を実施しています。当日は親と同じユニフォームを着用し、

の高校生を対象に公開体験セミナー「教えて!病院のお仕事」を実施しています。毎回、先輩たちに熱心に質問する未来の医療従事者の頼もしい姿を見ることができます。昨年度は新たな取り組みとして小学校高学年を対象とした「薬剤師のお仕事体験」を実施しました。このような取り組みを通して、職員の家族や地域の方々が楽しく子育てできるよう今後も貢献していきたいと思ひます。



男性スタッフの育児休業の取得率のUPなどまだまだ課題はありますが、今後も女性医師、女性スタッフがより一層活躍できる職場環境の充実への取り組みを継続してまいります。



編集後記

2021年が始まりましたが、昨年引き続き新型コロナウイルスがまだまだ猛威を振るい、感染力の強い変異株の出現により自粛生活を余儀なくされています。オリンピック延期も危ぶまれる中、いよいよ医療従事者へのワクチン接種開始時期が近づいてきました。みなさまご承知のように、ファイザー社とモデルナ社のmRNAワクチン、アストラゼネカ社のウイルスベクターワクチンが今後開始になる予定です。

人類と感染症は以前よりパンデミックを繰り返してきました。14世紀半ばから流行したペスト(中世ヨーロッパで人口の1/3が死亡)、15世紀からの天然痘(1980年5月ワクチンにより世界根絶宣言)、1918年世界中で大流行したインフルエンザ(通称「スペイン風邪」)は約3年かけて鎮静化されました。

コロナウイルスも今までは風邪として治癒していくようなウイルスでしたが、2002年に中国で感染拡大し、致死率約10%のSARS(重症急性呼吸器症候群)として2003年にかけて流行しました。その後アラビア半島でも重症肺炎が流行し中東呼吸器症候群(MERS)と呼ばれ、致死率約34%と恐れられました。

今回の新型コロナウイルス感染症によるパンデミック収束に向けての切り札はワクチンしかありません。治療薬の開発には相当な時間を要します。ワクチン開発も国内でも鋭意進行中ですし、終生免疫獲得が可能なワクチンも開発中とのことです。これからも私たちはウイルスと共存していかなければなりません。コロナ収束に向けてあと数年辛抱の日々が続きますが、会員の皆様どうぞご自愛ください。

岡山県医師会女医部会委員 草場珠郁子